

荻伏小学校学校林 ―森を育む子どもたち

「さて君たち、この字はなんと読みますか？」

西 浦河（現日高）支庁長は白墨をとつて黒板にさらさらと書きはじめた。最初に“西”と書き、次いでその下に“米”と書いた。四年生が手を上げた。

「はい、君」

「はい、クリです」

西の話聞きに来ていた村民も、お付きの者たちも思わず笑いを洩らした。

「これは、アワと読みます」

支庁長は苦笑しながらそれを訂正した。

明治三十五年、巡察の途中、荻伏小学校に立ち寄った支庁長は、子どもたちに植林の話をしたのだが、このときの話がどう村人のあいだに伝わったのか、植林する樹種は“栗”ということになり、一部ではかなりの量が植えられたのだという。彼は子どもたちに話すことを好んだし、荻伏方面に来たときには必ず荻小に立ち寄った。竹内鼎（たけのうちかなえ）の記憶でも、それは一度や二度ではなかった。話しぶりは優しく、噛んで含めるような調子だったという。

これは支庁長の訓令二十五号と呼ばれるもので、支庁長は国の方針を受けて小学校の基本財産をつくり、生徒の愛林思想を養うために、卒業記念植樹を奨励した。これを受けて、日高管内では様似、浦河、荻伏、三石の四村が、学校方針の一つとして取り入れている。

国有地の払い下げの規定では、樹木の伐採跡地、疎林地、不用な木の茂っている場所などは、植林をし、下草を刈って、木が手助けなしに伸びるようになるまで育てると、無償で払い下げられる。学校にもこの条件が適用されたので、荻伏の村民や学校関係者のあいだで、学校林の問題が真剣に討議さ

れ、学校の裏にあった国有未開地に木を植えることにした。これが荻伏小学校学校林の始まりである。

子どもたち、主として五、六年の上級生や、高等科の生徒が、不用の荒地の開墾を始めることになった。木は山の麓ほどよく育つ。山裾三～四〇メートルの巾を、頂上に向けて草を刈り木を植えてゆく。これをグルッと一周させれば、そのラインから山頂に向けた面積は、自動的に荻小のものになるという思惑だった。実に明治四十年までに、八二町からの貸付けを受けていたが、しかし大正になって払い下げの規定が変わり、この思惑はみごとに外れ、植林の成功分しか自分のものにならず、このため、植林総面積は十七町にしかならなかった。樹種は道推奨樹種のカラマツを二、三千本、多いときには五千本からの量を昭和十八年頃まで植え続けた。

これに生徒として参加した人びとによれば、まず鎌を持った五年生以上の者が防火線として、三～六メートルの巾で草を刈り、下から火を放つ。火の粉がとんで来たら木の枝でたたいて消したが、枯草や枯れ枝がゴウゴウと燃えるさまは本当に怖かったという。秋は秋で草を刈ったあとに植樹する。下草刈は春にやった。ウルシにかぶれる者もいれば、蛇も出た。フキを採ったり、ワラビを採ったり、後年思い返すと、それはひとつの故里（ふるさと）づくりのようなものだったという。

こうして植えた木々を意に反して自らの手で伐らねばならないときもあった。昭和十九年、元浦川

の東から東栄の砂浜にかけて、多くの軍のトーチカが造られたときに、生徒たちは自らの手で四十年間育てた木を、軍の非常伐採命令で大量に切り出して浜まで運んだという。

しかしこの学校林のおかげで荻伏小学校の備品や教材は、管内でも一番整えられたものだったし、修学旅行も全道で一、二番に長いもので、浦河小学校が二泊だったのに、四泊五泊をかけて函館、洞爺、札幌、小樽をたっぷりまわったものだった。昭和二年には、間伐材で教員住宅、同十二年には、目通し一尺以上に育てていたものを一部売却し、一部を材料として屋内体育館を建てたりもした。戦後になって、新制中学校ができたときには、野深、荻伏と二つの中学校を建てるために、育てた木を売り、育てた山を売り、積み立てた金を合わせて、その建設資金に充てた。

戦後の混乱期には、この授業の主な担い手となっていた小学校高等科が廃されたために、この課外授業は一時中断。二十六年から再開されるが、小学生だけでは力が足りなかった。このため、いたずらに父兄や先生たちの負担が増え、この教育方針を疑問視する声も出てきて、昭和三十八年、六十年間続けられた荻小の植林授業は中止された。その後学校林条例の変更に伴って、この山林は昭和五十年に浦河町の町有林に繰り入れられてしまった。

この授業に携わった人びと、先生や生徒、父兄などが異口同音に望むことは、現在町有林として残っているこの植林地二七町を、たとえば浦河町開基記念事業などとして、なにか子どもたちの研究施設として活用してほしいというものである。われわれの目にふれることはないのだが、町の、地域の気風というものはちゃんと育てていて、いつか芽を吹いてくる。基本的には、それをきちんとしたものに育てるのが教育であり、学校林ではなかったかと。

[文責 高田]

【話者】

竹内 鼎 浦河町上東栄 明治二十八年生まれ（平成三年三月没）

西口 清 浦河町荻伏 大正十年生まれ

安藤 政喜 白老町荻野 大正四年生まれ

【参考】

荻伏百年史 昭和五十八年 荻伏百年史編さん委員会